安政年間相模国における長州藩の医療

田中助一

徳川幕府は一八四七年（弘化四年）に外国船の渡来に対処するため、江戸湾の防備に着手した。そして相模国の三浦半島は彦根藩（藩主井伊掃部頭直弼、三五万石）が警備を命ぜられたが、一八五三年（嘉永六年）一一月一四日彦根藩に代えて長州萩藩（藩主毛利敬親、三六万九千石余）が命ぜられた。その範囲は鎌倉・三浦の二郡中六九か村（石高二万六百八六石余）で、上宮田（現三浦市南下浦町上宮田字大芝浦）に海防陣屋が設けられていた。

長州藩は一八五八年（安政五年）六月二〇日に兵庫警備に転任を命ぜられるまで、およそ五カ年間にわたって、沿岸警備と同時に民政を行ったが、その間軍規を厳正にし、善政を施したので、現地住民より大いに感謝され、熊本藩と交代の時には両郡の名主や村役人から留任の願書が出されたほどであった。

長州藩でその間に浦賀表御手当御用惣奉行を命ぜられたのは、益田越中（親施）・毛利隠岐・毛利主計・毛利筑前・福原左近之允等五人の家老で、益田だけ任地に出張し、他は皆江戸の藩邸にあって用を弁じたのである。

最初の惣奉行に任命された益田は、二一歳の青年であったが、一八五四年（安政元年）正月一〇日萩を出発して二月二日江戸に到着、三月二五日江戸を発して翌二六日に上宮田の陣屋に到着し、翌二年三月一七日まで在任した。

益田は赴任に先立って藩中の学識経験者数十人に、意見書を提出して貰った。（益田家に現存）この時最初に従軍を命ぜられた藩医は、田原玄周（蘭学者、西洋軍学者）・永田意三（イサン）（外科医）・重見宗庵（蘭学者）・東條英庵（蘭学者）の四人で、出発に先立ち西洋の例をひいて衛戍病院の設置を請願しているが、このことはある程度実現した様子であり、日本の軍陣衛生史の上で重要なことである。

向学心の強い者は在勤中用事のない時には、蘭学や西洋軍学や武芸などを学ぶことを許可し、益田惣奉行自身も安政元年七月二七日に藩の高島流砲術家郡司覚之進（のち千

左衛門）から砲術の伝授を受けている。このように司令官をはじめとして各々その在任期間を有効に全うしたのであった。

（付一）益田が陣屋に着任した翌日、長州藩の山鹿流軍学師範吉田松陰（益田の軍学の師、三歳年上）が同志金子重輔と共に伊豆下田で米艦に投じて失敗した。

（付二）作家司馬遼太郎原作のテレビドラマ「竜馬がゆく」の中に、安政元年三月のある日、土佐の郷士坂本竜馬が、長州藩の陣屋を訪れて益田に面会し、長州藩士と剣術試合を行ったのち、はじめて巡視中の長州藩士桂小五郎（木戸孝允）に遭遇の刀を抜き合う場面があったが、このことはフィクションであることを土佐藩史の権威平尾道雄氏より承っている。なお桂は当時江戸に剣術修業に出ていて、三月二七日に相模国出張を命ぜられ、直ちに宮田陣屋に赴いている。

宮田陣屋派遣の医員は、最初四人任命されたが、翌安政元年正月一六日に人員が増され、栗山玄厚・小倉秀伯・飯田正伯・曽禄玄育・山根文季の五人が追加され、三月五日に萩を出発して赴任した。

田原・永田・重見・東條の四人は伊東玄朴に、小倉は多紀安叔に、栗山・飯田も伊東玄朴にそれぞれ師事することが許された。山根はのちに砲術及び写真術を以て活躍する長男の小野為八を同行した。

これよりさき長州藩では、一八四九年（嘉永二年）一〇月二日より萩で種痘を盛んに行っていたので、一八五五年（安政二年）正月二五日に藩医中村貫二（蘭学者）が宮田陣屋の番手を命ぜられたので、同地において牛痘接種を行いたいと願い出て許可され、藩の医学館で伝習を受けた。

同年三月一二日に幕府より備場付医員東條英庵を浦賀奉行組内の者に一カ年の予定をもって蘭学教授に出すように希望してきたので、その後任として江戸在住の藩医坪井信友が番手に加えられた。

同年六月一一日に飯田正伯・中村貫二・岡田以伯等が備場番手直詰を命ぜられた。

安政三年正月一八日に中所（ナカジ）竜伯・松尾養琢の二人が番手を命ぜられた。松尾も同地に行って牛痘接種の実施を願い、二月二四日に伝授方を許可された。現在三浦市初音町三戸の前田家に当時の集団種痘の記録が残っているとい

う。

このように長州藩は相模国備場においては住民に対しても善政を施こしたので、一二五年たった今日も語り伝えられ、不幸にして勤務中に病気や震災で死亡した人達に対しても手厚い供養が営まれているのである。

（萩市・開業医）

いわゆる「ターヘル・アナトミア」と解体新書の比較（その四）

酒井　恒

解体新書巻の四の内容をいわゆる「ターヘル・アナトミア」のそれと比較したので、その主な相異点を、紙面の都合によりその一部を略して記す。個々の用語については略す。

第二十三表　脾臓について「暗赤色」を其色青紫と記し、また、後表の肝臓及び腎臓の色も原典とは異なる。その形状は「それが取り出された動物自身の舌におおよそ一致する」を其形者如牛舌と訳す。脾動脈の「血液は脾臓の中に流れ込む」を是従此送内血と主語を変え、脾臓の作用に製血を加え、原典では胆汁が脾臓から肝臓の中に分泌されるとしているのに対し佐肝之分利胆汁也と訳し、門脈についての解体約図の誤りを訂正している。

第二十四表　肝臓及び胆嚢について、肝臓の下面の状態